



新九郎 11月の展覧会のご案内

	会 期 展覧会名	見どころ	会期・展覧会名	会場
	11/6(水)～11(月) ラ・パレット油絵展 31 回	内容と技法は車の両輪で、どちらも深めていかないとうまい具合に進まない。会員 11 名、指導：指原いく子先生	11/6(水)～11(月) 第 23 回やまぼうし工芸展	飛鳥画廊 0465-24-2411
	11/13(水)～18(月) 書学舎翠會書藝展	書と篆刻、児童から大人まで 出品者 22 人 指導：下田翠雨先生	11/13(水)～18(月) 陶和会作陶展	飛鳥画廊 0465-24-2411
	11/20(水)～25(月) 第 4 回機會木版画展	会員 14 名、40 点の木版画 モットーは“和を持って木版画を楽しむ”	11/20(水)～24(日) 金泥写経展 法華経の世界	飛鳥画廊 0465-24-2411
	11/22(金) 新九郎デッサン会	どなたでもお気軽にどうぞ！ 18:15-20:45 会費 1500 円 コスチューム、固定ポーズ	11/27(木)～12/2(月) 二見智・近藤満丸二人展 1	飛鳥画廊 0465-24-2411
	11/27(水)～12/2(月) 赤羽孝也・加藤由宇・ 瀬沼杏壽展	赤羽孝也さん「陶」は昨年の 個展に続き 2 回目の発表です 加藤由宇さん、瀬沼杏壽さん は個性に溢れ感性豊かな絵画	11/7(木)～11(月) りんどう絵画会グループ展	ツノダ画廊 0465-22-4263
			11/13(水)～18(月) 今村景意子展	お堀端画廊 0465-23-7819
			11/7(水)～11(月) 第 13 回水彩画クラブ展	アオキ画廊 1F 0465-22-0825
			11/8(金)～19(火)水・木休み 赤羽孝也 作陶展	ギャラリーさざれ石 0463-67-9662
			10/30(水)～11/9(土) それ ぞれのマティエール 想と創	ギャラリーぜん 0463-83-4031
			11/6(水)～10(日) 光彩展	町田市立国際版画美術館市 民美術室 A 042-726-2771

十月のこと

横浜で黄金町バザール20013が開かれていて、日の出町のギャラリー「エムジアーツ」で吉本伊織展があった。吉本氏は昨年十一月のASHIGARAアートフェスティバルで、ソウセイカフエを会場に、私と二人展をやった頂いた間柄である。入れ違いで本人に会えず残念であった。最近数年の作品と今年の新作三点展示が展示されていた。「景」と題する風景画のシリーズである。具象であるがシンブルで直線的な構図、色彩は黒・白・グレイと僅かな青・緑等のモノトーンの世間で抽象的である。絵具には鉛が混ぜられ、底光りがしている。新作はより抽象化され、前の作品がなければ風景画とわからないだろう。しかしそれだけ追及する美が明確になり、一段と進化していると感じた。近くイタリアにアーティストの新九郎デンスで行くと聞いた。十二月の新九郎アートフェスティバルに参加したいので頂くことになっており、今から楽しみにある。

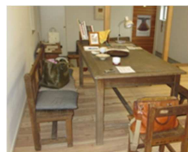
日本橋高島屋で重野克明銅版画展を見た。重野氏の銅版画は2004年銀座座敷の画廊で、一目見て惹きつけられ購入した。2005年には新九郎で個展をして頂いた。東京芸大大学院修士課程版画専攻修了で、日本版画協会賞・B審査員特別賞を受賞している。駒井哲郎、中林忠良と一緒に日本銅版画の正統の継承者であるかと、私は勝手に思っている。ここ数年銅版画から離れ、ドローイングを中心年に制作してきた。作風も変化し、冒險王や少女漫画のスタイル画を思わせる昭和のレトロな世界を描き、夢野久作や鳥居みゆきの著作の挿絵を手掛けるなど、ノスタルジー溢れる世界を展開している。また高校球児で、今でも草野球に興ずる野球はモチーフとして変わらず続いている。今回の個展は、本来の銅版画に戻っての発表で待ち望んでいたものだった。牧野邦夫写真実の極みをモチーフに妖しい美を描き、自身の生活を劇画的に描いたもの、POPな作品、俳句的なもの、等々実に多彩な作品であった。思いがけず本人にも会え欠々に話しかけた。出来た。作品の多彩さを尋ねたところ「(自分の世界を) 版画にしてみたらこゝろになると考え、制作している。」とのことだった。(※)

ギャラリー訪問

「知る人ぞ知る」という言葉がぴったりの美術館がある。南足柄中学校の近く閑静な住宅街にあるが、その姿は外からは見えない。家の入口に、「Museum from winds」と書かれた小さな看板が目印だ。緑豊かな庭を抜けると住居の奥にひっそりと建っているのだ。

来場者は、地元の方よりむしろ県内外からその展示に惹かれて訪れる方が多い。口コミで広がり、作品に出会いに来る絵好きな方が多いのが特徴だ。ここで今、『洲之内徹生誕100年記念 気まぐれ美術館の絵かきたち展』が開かれている。個人美術館でこんな企画が可能なのかと、作品共々オーナーの窪田さんに企画展への思いを伺った。

ドアを開けるとそこには別世界が開けていた。シンプルで明るいギャラリーには、心地よい風が吹きぬけているようだった。白い壁、まだ木の香の残る白木のミュージアムは、野村悦子氏の作品だ。オーナーの好きな李禹煥（リ・ウーハン）の作品をイメージして造られたという館内は、自由に絵を味わってほしいというオーナーの「お・も・て・な・し」が伝わる展示だ。床にはアンティークな木のテーブルとイスが置かれ、洲之内徹の「気まぐれ美術館」が並んでいた。



まずは作品を拝見した。一番最初に目についたのは、長谷川瀧二郎だ。庭木の独特の緑、シルエットのような鳩が3羽。

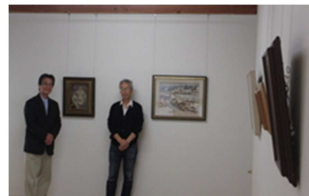
幻想的で時間が止まっているようだ。正面の静かな家並みの絵も好きだ。好きな絵は自然に目に飛び込んでくるから不思議だ。ゆったりと掛けられた絵。キャプションや説明を一切廃し、絵だけを見せる展示からオーナーの思いが伝わってくる。作家の名前はわからなくても、いいなあと思う作品ばかりだ。和室にさりげなく置かれた醤油の瓶も何ともいい味だ。何うと松田正平さんのアトリエにあったものをご遺族から譲っていただいたのだという。こんな細やかな展示にも、オーナーの美意識が伝わってくる。

松本竣介 野田英夫 長谷川利行 安井曾太郎 今西中通 田島隆夫 峰村リツ子などなど・・・初めて知った名前もあったが、どれも見ごたえのある作品ばかりだ。「1枚ももらえたらどれにしよう」いつもの癖で色々な作品を見直すと、また違った絵に見え

museum from winds

てきて楽しい。

「洲之内徹」は画商でありながら本当に気に入ったものは手元に残し、客には売らなかったという。その作品が「洲之内コレクション」として宮城県立美術館に収められている。数年前そこで長谷川瀧二郎の『猫』を見る事が出来たことを思い出す。自分が『佳い』と思った作品をこれだけ集



め、展示することは大変なご苦労があったことと思う。企画に向け窪田さんが選んだ作品は、全国30県から来場されているという「フロムウインズ」のファンの方のご厚意によるものだという。大事な作品を快く貸し出してくださったコレクターの誠意と、良い作品をより多くの人に伝えたいという「洲之内徹」をリスペクトする皆さんの思いに改めて感謝感激だ。

窪田さんは長年公務員として勤められた。35歳、仕事で企画した展覧会でアートと出会ったという。新聞社企画の巡回展「ピカソのポスター原画展」「原田泰治展」「滝平二郎切り絵展」など、人気ある作家の展覧会に会場の市役所アトリウムは連日多くの市民で賑わった。始めは向学の為と足を運んだ展覧会は、27年間で1900回を超え、美術館も全国280か所を回ったというから並のアートファンではない。仕事の傍ら毎週末銀座の画廊や展覧会に通ったとしても相当な時間とエネルギーを注いできたことになる。数多く見ることで、自分の好きなものがはっきりとし、目が鍛えられたという。「好きなものは良いもの、良いものは調和する」。時間をかけて培われた感性は、「絵は知識や理屈で見えるものではない」「自分が共感し心が動くもの」「絵と一体化すること」という独自の審美眼で、李禹煥、松田正平のコレクションに繋がっていった。特に「松田正平」への傾倒は大きく、直接アトリウムを訪ね熱い思いを伝えたという行動力には敬服した。その真摯でひたむきな姿勢は「松田正平」にも伝わっていたことだろう。美術館の設計図面ができるとそれを持って松田さんの墓前に報告したという窪田さんの人柄を、「松田正平」は初めからわかっている

南足柄市 雨坪

たに違いない。それはやがて美術館建設という具体的な目標となり、早期退職した7年前「フロムウインズ」は誕生した。

『良い絵は何度見ても新鮮であること』『人は感動する』『良い絵は人を幸せにする』『いい絵は絵が美を発している』生活のすべてを費やしてアートを見つけたからこそ言える窪田さんの言葉は、物静かだが力強く説得力を持っていた。絵描きの外側はどうでもいいものと言いきる窪田さんが、履歴やインテリを嫌った「洲之内徹」と重なってみえた瞬間だった。芸術に目覚め、自分の人生の中心線を美術館運営に捧げる第2の人生は、多くのひとの出会いに恵まれ、それを宝と言われた。絵を語るときの幸せそうな笑顔が、何より饒舌に語っていた。

窪田さんは若い人たちにもっともっと見に来てほしいという。近隣の高等学校には案内をしているが、訪ねてくる学校は少ないようだ。もっともっと文化に触れる機会を教育の中には取り入れてほしい。一人で訪ねていく自立した若者も増えてほしい。そしてそれを伝えることのできる先生方には、ぜひ観て感じてほしいところだ。

窪田さんは今、来年3月からの宇和島の作家「森本秀樹展」を準備しているという。窪田さんの心に響いた作家の作品が私にはどのように感じる事が出来るのか、今から楽しみである。

帰り道、躊躇いがあって伺えなかったこと



を考えていた。窪田さんが、なぜわざわざ奥まったところに美術館を造

られたのかという事だ。そして、身の丈の100%を描かない、これ見よがしを嫌う絵かきたちの美に共感した窪田さんの感性が、こうさせたのではないかと、その理由が少しわかったような気がして「フロムウインズ」を後にした。（新九郎友の会 木下和子）

洲之内徹生誕100年記念

「気まぐれ美術館の絵描きたち展」

2013年8/8～2014年1月26日(日)

南足柄市雨坪 404 TEL 0465-74-1559

【開館日】木～日 10:00-16:00

入館料 500円

「ようこそ松永記念館」 第3回松永記念館交流美術展

ガラスの煌き ルネ・ラリック—金唐紙と織りなす花鳥風月の浪漫—

平成25年10月25日(金)～12月8日(日) 9:00-17:00

観覧料 一般500円大・高生300円

設立者・松永耳庵（安左エ門）が自身のコレクションを一般に広く展覧するために設立した松永記念館で、近隣の美術館が所蔵する優れた名品をご紹介します交流美術展。第3回目となる本年は、箱根ラリック美術館のご協力を得て開催します。

フランスを代表する宝飾とガラスの工芸作家ルネ・ラリック（1860-1945）。今回の展示では、草花や鳥などの自然を題材に豊かな発想でデザインされた花器を中心に華やかな工芸紙「金唐紙」と併せてご紹介します。

金唐紙はヨーロッパの金唐草紙を和紙に置き換えた工芸紙で、鹿鳴館や旧岩崎邸などの壁紙にも用いられたものです。日本で唯一金唐紙を手がける上田尚氏（国選定保存技

術保持者）の作品とラリック作品に共通する花鳥風月のモチーフ。両者が奏でる豊かな美の空間をご堪能ください。なお、会期中は箱根ラリック美術館学芸員の橋本公氏によるギャラリートーク（11月3日）をはじめ、松永耳庵の園遊会にちなんだ催事「夢見遊山いたばし見聞楽」など多彩なイベントを予定しています。（詳細は郷土文化館までTel0465-23-1377）。みなさまのお越しをお待ちしています。



松永記念館学芸員 中村暢子